The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドゥルーズ哲学における思想的断絶と変遷 ： 自然の問題を中心に
Author(s)	小林, 卓也
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/33992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕ドゥルーズ哲学における思想的断絶と変遷
――自然の問題を中心に――

学位申請者　　小林　卓也

本論文は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze 1925-1995)の哲学の思想的変遷を辿ることを目的としている。とりわけ、1950年代における個別的な哲学史研究から始まり、1980年代における固有の自然哲学を構築するに至るドゥルーズ哲学の変遷を、その問題意識と概念の変化を追うことで明らかにした。

本論文は、ドゥルーズ哲学の思想的変遷において、自然哲学の構築へと向かう起点となるとともに、それ以前のドゥルーズ哲学を分断する断絶を特定する第Ⅰ部（第一章、第二章）と、そのような断絶を含むドゥルーズ哲学が、前期から後期にかけて、どのような思想的変動や変遷を経ることで、最終的に、その非人間主義的な自然哲学を構築するに至りえたのかを明らかにする第Ⅱ部（第三章から第六章）から構成されている。

第一章では、『意味の論理学』(1969)と『アンチ・オイディプス』(1972)における器官なき身体という概念に変動があることに着目し、これを、両著作におけるメラニー・クラインの精神分析に対する評価の変化から検討した。『意味の論理学』における器官なき身体は、幼児の発達段階に含まれる要素や何らかの臨床的実体として理解されていたのに対し、『アンチ・オイディプス』のそれは、マルクスの資本概念と重ね合わされることで、固有の論理（接続的総合、離接的総合、連接的総合）に従い、その内部においてあらゆる部分対象を接続し、生産、登録、消費を実行するプロセスとして理解されていることが示された。

第二章では、第一章で示された断絶が、自然という観点から捉え返された。すなわち、『アンチ・オイディプス』において分裂症に固有の様態として提起される「人間と自然の同一性」という論点が、『意味の論理学』の時点でのドゥルーズ哲学によっては肯定的に捉えられないということを示すことによって、ここに、前期ドゥルーズと後期ドゥルーズの哲学を概念的に区分する断絶があることが主張された。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で特定された断絶を認めた上で、ドゥルーズ哲学全体がその前期から後期へとどのように変遷したのかを論じることを目的としている。そこでは、ドゥルーズ哲学の概念的布置が、脱人間主義的なものから、人間と自然の同一性という観点を経て、非人間主義的なものへと変化する過程として理解されることが示された。

第三章と第四章では、前期ドゥルーズ哲学の問題背景を解明するべく、それを特徴づける超越論的経験論の内実が分析された。とりわけ、第三章では、1956年と57年にかけて行われた「基礎づけるとは何か」という講義に着目し、そこにおいて明示的に参照されているポスト・カント主義という哲学史的文脈が、1963年に発表される『カントの批判哲学』と「カント美学における発生の問題」の議論を牽引する要因となっていることを示した。すなわち、ドゥルーズは、ハイデガーにおける人間の有限性と、ポスト・カント主義における発生という論点を、カント哲学のなかに読み込むことで、それを限界の発生による能力間の本性上の差異の規定という論点として理解していた。ドゥルーズはここに、カントの超越論哲学の根幹を読み取っている。

第四章では、こうしたカント哲学の読解を経て、ドゥルーズがどのように自身の超越論的経験論を構築するに至ったのか、その過程が明らかにされた。とりわけ強調されたのは、ベルクソン哲学の重要性である。すなわち、ドゥルーズは、一貫してベルクソン哲学を「反ーカント」として位置づけるとともに、持続（本性的差異）、直観、現実性と潜在性といった概念を独自の仕方で鋳直すことによって、それをカントの超越論哲学の問題点を乗り越える手段へと仕立て上げる。とりわけ、ベルクソンの質的多様体の議論が『差異と反復』に至り、ベルクソン自身が『試論』において曖昧なままに残しておいた強度概念に適応されることで、カントの内包量と直観の公理を批判する重要な論点となっていることが主張された。これは、結果的に、カント哲学においても、ベルクソンにおいても把捉しえない、感覚されうるものの存在としての強度が、まさに、経験的な質や延長の只中において感覚される論理を示すことになる。これがドゥルーズの超越論的経験論に固有の論点であるとともに、80年代に展開されるドゥルーズの自然哲学へと直結する論点であることが示された。

第五章と第六章の目的は、『アンチ・オイディプス』以降、明示的に展開されるドゥルーズの自然哲学が、前期ドゥルーズの哲学からどのような変遷を経て構築されるに至ったのかを示すことであった。

第五章では、後期のドゥルーズへと直結する自然主義という論点が、『意味の論理学』におけるエピクロス派のなかに萌芽的に認められることが指摘された。しかし、第三章と第四章で指摘したように、前期ドゥルーズの超越論的経験論は、諸能力の協働を前提とするカント哲学はもちろん、ベルクソンの直観概念や持続概念に残存していた心理的観点を脱心理化、脱人間化することにその関心が向けられている。そのため、超越論的経験論は、ある種の薬理学的経験や分裂症者において経験される特異的な経験と結び付けられて理解されることになる。その結果、前期ドゥルーズは、エピクロス派の自然主義を論じていたにもかかわらず、そこから、『アンチ・オイディプス』やそれ以降の自然哲学へと直結する論点を十分肯定的に取り出しえなかったことが明らかとなった。すなわち、本来の意味における超越論的経験論が可能となるのは、それが対象とする超越論的領野や強度といったものを、臨床的実体のなかに見出すのではなく、いかなる人間的形象にも依存することのない、自然そのものの運動性として理解する必要があったということである。

第六章では、再び『差異と反復』に戻り、そこにおけるカントの「純粋悟性概念の演繹」に対するドゥルーズの批判が、後期ドゥルーズの自然哲学が対象とする特異な自然のあり方を思考する要因となったことが示された。その結果、ドゥルーズの哲学は、スピノザとユクスキュルに見出されるエトロジー（生態学）を参照しつつ、いかなる主観的な原理も、外在的な超越も持ち込むことなく、身体や物質を構成する無際限の微細な諸要素のあいだで間断なく生じ続けるリズム、運動、速度によってのみ構成される自然と、その内部における存立性を描き出す、一種の自然哲学として構築されることになる。これはカントの感性論に代わって、自然の内部に固有の総合や運動性の原理を見出す、「自然の感性論」として理解されるべきであることが主張された。

本論文の主張は、このように、ドゥルーズ哲学の思想的変遷が、自然という論点が徐々に主題化されるとともに、脱人間主義から非人間主義へと至ることで、最終的に特異な「自然の感性論」を構築することになる過程として理解されるということである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小林卓也　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	檜垣立哉
	副 査　准教授	村上靖彦
	副 査　教授	中山康雄
	副 査　関西学院大学教授	米虫正巳

論文審査の結果の要旨

本論文は、『ドゥルーズ哲学における思想的断絶と変遷－－自然の問題を中心に－－』と題され、フランスの現代哲学者、ジル・ドゥルーズの哲学の体系と変遷を、とりわけ「自然」という論点から読み解きつつ、あらたな解釈を提示しようとするものである。

論者の議論のおおきな骨子は次の三点にわけられる。第一に、ドゥルーズにおいて、二〇世紀のあらたな自然哲学の展開をみる視点そのものは決してオリジナルなものではないが、そのときに、ドゥルーズの自然哲学というものへのアプローチが、七〇年代以前の著作（『差違と反復』およびとりわけ『意味の論理学』）と、七〇年代以降のそれ（とりわけ『アンチ・オイディプス』）とでは異なっており、前者における脱－人間化としての自然主義（それは臨床という仕方で提示される）と、後者における非－人間化としての自然主義（それはある種の自然唯物論への回帰と理解される）とのあいだにおおきな分割線をひき、その意義を探っている。そして第二に、こうして、後期においてとりわけ独自なものとして展開される自然主義へのルートが、ドゥルーズ自身の初期論稿、とりわけさまざまな哲学者たちを論じた若い時点での議論のなかに見てとることができ、とりわけカント哲学のベルクソン哲学による批判とその独自の展開にその本質がみいだしうることを指摘したことにある。そして第三点としては、それをうけた上でのドゥルーズ流の唯物論が独自の生態学や記号生態系の議論とむすびつくかたちで展開されうることを明示したことにある。

各部ごとに流れを追うことにしよう。

第Ⅰ部は「ドゥルーズ哲学における断絶としての自然概念」と題され、本稿の主要な主張であるドゥルーズ自身の自然概念がとりだされる前提となる、六〇年代から七〇年代の転換期の思考に焦点があてられる。そこでは「器官なき身体」や、メラニー・クラインに関する議論の『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』との差違がとりあげられ、前者が一種の精神病的な事態への臨床的な経験の記述であり、それ自身が人間的な自然のひとつのありようを示しつつも、やはり脱－人間化としての志向に収斂してしまうのに対し、後者では「生産」というキーワードがたてられ、同じ分裂症＝統合失調症領域を論じる際にもまったくその扱い方が異なる点がきわだされていく。そこでマルクスの価値論が一種の補助線としてドゥルーズの思考に入り込んできたことが示される。前者が否定性の導入にとどまるのに対し、後者は生産という自体と連関していくのである。

第Ⅱ部は「自然の問題から見たドゥルーズ哲学の変遷－脱人間主義から非人間主義へ」と題され、ドゥルーズのオリジナルな議論の生成期における、カントとベルクソンの思考の交錯を細かに検討することによって、ドゥルーズが独自の超越論的経験論という一種の矛盾語法のような方法論に到達したことの内容が提示される。そしてドゥルーズの自然という概念は、カント哲学を、ベルクソン哲学を媒介とした感性論をそのまま超越論化するこのプロセスのなかで成立しえたも

のであり、このあり方がドゥルーズの思考総体を規定するものであるととらえるのである。この章ではさらにエピクロス派などの自然概念のドゥルーズへの関連もとりあげられている。そしてこの第Ⅱ部の終わりにいたって、ドゥルーズ自身の自然概念が、こうしたカント批判から後期の諸主題－－内在平面やエソロジーやリズム論など－－に接続されるあり方が具体的に示され論が閉じられる仕組みになっている。

総じて言えば、後期の自然概念を示すというよりも、ドゥルーズが固有の自然概念にいたる道筋とそこへの議論のルートを、詳細な文献読解により細かく提示するという志向がつよく、思想史的な読解として高く評価できるものであると考えられる。超越論的経験論の重要性やその自然主義との連関は、おおきな道筋としていえば、世界的にみてもパリ第１０大学のアンヌ・ソヴァニャルグやトゥルーズ大学のピエール・モンテベロなどが現在時点で試みているものであるが、本論は初期の論稿の精緻な読解と、そこでのドゥルーズの独自な議論が成立するポイントとなるカントの議論への批判とベルクソン的な感性論的な自然の議論の適用という、いわば思考自体の生成史にポイントをおいたものとして、高い評価を与えることができるものであるとおもわれる。そのうえ、本論の段階では、全体量の制約やバランスゆえに、あまり踏み込むことができなかった、マルクスの価値論との交錯や、実り多い後期の感性論的自然の議論についても一定の研究の目処がつけられている。この点からみても、本論は今後の議論にも方向性をみてとれるとかんがえることができる。

よって本論は博士(人間科学)を付与するのにふさわしい論文であると判断される。